訃報

梁思永氏の長逝

中共科学院考古研究所の副所長であつた梁思永氏が昨一九五四年の四月二日に北京で逝去された。氏は中国での新しい考古学の開拓者として、今世紀の東亜考古学の上に劃期的な殷代古墓群発掘調査を主裁、かがやかしい業績を挙げた学者であるので、その長逝が学界から痛惜される。

梁啓超の令息として一九〇四年に上海に生れ、日本で幼年時代を過した後、清華学校で新しい教育を受けて、一九二三年にその課程を終えた氏は、アメリカに赴きハーバード大学の研究院で、人類考古の学を修得した。時恰も瑞典のアンダーソン博士の史前彩陶文化の調査が一つの機縁となつて中国での此の新しい学問えの関心が世界的に高まつていた際であつたので、滞米数年の間に当時行われていた山西省夏県西陰村の同種の史前遺跡の出土品の整理に従つて、成果を挙げた。かくて帰国後中国での考古学研究の中心機関として新たに発足した中央研究院歴史語言研究所の考古組に迎えられ、李済氏と協力することになつたのである。氏の研究所での活動は先づ一九三〇年秋に熱河から黒龍省えの調査旅行にはじまつて、昂々溪での史前遺跡の発掘を行うた。ついで山東城子崖の第二次の発掘作業を経て、やがて有名な河南省安陽の殷墟の発掘に主力を傾倒したのである。

殷墟の調査では、一九三〇年に同地後岡の新しい地区の発掘で、攪乱を受けない層序と土器との関係から、同地の史前に彩陶・黒陶・白陶の三つの土器様式に依る文化段階が考えられる一事相を指摘し、更に一九三四年から侯家荘の西北崗を中心とした殷墓群の発掘調査を担当、前後三期に亙り、十基の大墓をはじめ無慮千二百の古墓群の調査を行うて、大きな成果を挙げた。一九三六年には祁延霈氏と山東省日照県両城鎮の黒陶遺跡の調査に従事し関係資料を豊富にしたのであつた。

然るに翌年不幸な日華事変が起つたので、研究機関と共に一部遺品を携えて長沙に移り、更に事変の拡大と共に桂林・昆明等と転々、極めて困難な研究生活をつづけることを余儀なくさせられた。元来蒲柳の質であつた氏は、この為に太平洋戦争がはじまつた一九四一年に肺を病んで、四川の南溪李荘でのながい療養生活に入つた。そして終戦の年重慶で大手術を受けたのである。翌年北京に帰つていよ〳〵侯家荘古墓群の調査報告の執筆を志したのであるが健康旧に復することなく、中共政府の成立の直後衆望を負うて科学院考古研究所の副所長に挙げられたが、遂にたたず、享年僅かに五十一歳で、云わばいたましい過般の大戦の犠牲者として其の短い生活を終つたのである。

梁氏は全くの学究肌の人であつて、滞米の研学の間、アメリカ・インデアン遺跡の発掘に加わつて、考古の学の実地に就いての面をも修得する所があり、帰国後、これを中国の所謂田野工作に実施して史前から殷代に亙る遺跡の調査を行い、先づ確実な基礎事実の闡明につとめ、然る後それ等に即した考察を試みたのであつた。「後岡発掘小記」と「小屯龍山与仰韶」とはそれを示す具体的な述作として注目される。殷墟の発掘工作は、そう云う氏の参加に依つて、当初の云わば遺物の収得から、全面的なそれ自体の開明えの大きな転機をなしたとも云い得るであろう。氏が侯家荘の古墓群の発掘に於いて示した発掘調査者としての手腕は、西欧のその道の学者をも

超ゆるものであつた。殊にその攪乱された大墓の間から、黄土に印した木製の太鼓や、木棺、容器等の印影を丹念に検出、その復原を可能にした驚く可き作業の遂行は特筆せらる可きである。

氏はまた田野工作に従事する学徒として何よりも先づ、調査報告の公刊を第一義としていた。この事は一九二八年の秋ハーバード大学で強くも筆者にかたつた所であつて、爾後の調査を通じて、よく実践されたこと、その著述の示すが如くである。ただ不幸な戦乱に依つて、最も著しい侯家荘古墓群の調査の結果が、氏自からは僅かに一九三七年に行われた出土器の展観の目録にその片鱗を示したのみで、遂にその手で纒められるに至らなかつたこと何人よりも氏自身深く責としたに相違ない。終戦の直後の病中筆者が戦時中南京で同所に遺留されていた関係遺物の調査に関与した事を知つて、上記木器類印影の復原写真の提供方を申し入れて来た。中共科学院考古研究所副院長就任後、病をおして、事に当つたことの伝えられるのは、その事と思い併されて、その長逝に対し氏を知る人を深くもいたましめるものである。

氏の人となりは、内に毅然たる所を蔵しながら、まことに長者の風があつた。そして学問に対しては国境を超えてその発達を熱願していた。排日思想の横溢していた一九三六年春、南京訪問の際、氏の示された学問上の好意は私の終世忘れ得ない所である。終りに著作目録を載せて、この優れた而も薄幸な考古学者の長逝を哀悼する。

主要著述目録

New Stone Age Pottery from the Prehistoric Site at Hsi-Yin Tsun, Shansi, China (Memoirs of the American Anthropological Association, No. 37. 1930)

Some Problems of Far Eastern archaeology, (American Anthropologist, New Series, Vol. 34, No. 3, 1932)

「昂昂溪史前遺址」（『歴史語言研究所集刊』四本一分　一九三三年）

「後岡発掘小記」（『安陽発掘報告』第四冊　一九三三年）

「小屯龍山与仰韶」（『慶祝蔡元培先生六十五歳論文集』下冊　一九三三年）

城子崖「建築之遺留」（呉金鼎共著『城子崖』所載　一九三六年）

城子崖「石骨角蚌及金属製品」（同上）

城子崖「墓葬与人類獣類、鳥類之遺骨及介類之遺殼」（『城子崖』所載　一九三六年）

熱河不干廟林西雙井赤峯等処所採集之新石器時代石器与陶片」（『田野考古報告』第一冊　一九三六年）

龍山文化—中国文明的史前期之一（『第六回太平洋学術会議会誌』第四冊　一九三九年及『考古学報』第七冊　一九五四年）

編　纂

『城子崖』（李済・董作賓共編）中国考古報告集第一種（一九三四年）

『国立中央研究院参加教育部第二次全国展覧会出品目録』（一九三七年）

（梅原末治）

馬衡先生の訃

北京にあつて病気の静養中ということであつた馬衡先生が、去る三月二十六日、ついに逝去された。享年七十四歳。現に北京文物整理委員会主任委員の職にあつた同氏のために、同月二十九日、盛大な公祭がいとなまれた。主祭は人民共和国文化部長沈雁冰、陪祭には沈鈞儒、邵力子、陳垣、朱啓鈐、鄭振鐸、夏鼐、郭宝鈞等の名がみえている。

馬衡先生は字を叔平といい、浙江鄞県の人、小柄な体格であつたが、謹直そのもののごとき風格はいまなおわすれることができない。一九二三年、北京大学の教授となり、同大学研究所国学門の導師を兼ね、中国金石学の講義を担当された。その講義のプリントは、一部石刻の部が、かつて『東洋史研究』に訳載されたことがある。金石のうちでも、とくに漢魏の石経はくわしく、専著もあるし、また一九二四年には洛陽朱圪墻村の石経出土地、つまり漢魏の太学遺址を踏査し、めづらしい文字瓦当なども採集してかえられたことがある。

また古代度量衡の研究にもふかく、「新嘉量」を考繹され、これにもとづいて「隋書律暦志十五等尺」の一書をあらわされた。一九二三年には、新鄭および孟津において青銅器の大量出土がつたえられたので、これが踏査をこころみられ、孟津の青銅車馬具は北京大学にもちかえられた。とにかく、ばら〳〵の車馬具でなく、こうした一群の車馬具はめづらしかつたので、王国維とはかり車馬具の考定をされる予定であつたが、王国維の死によつてはたされなかつた。

一九二六年、わが浜田耕作、原田淑人先生たちが、東亜考古学会を結成されると、馬衡先生は呼応して北京大学考古学会を組織され、一九二七年、一九二八年にはわが国に来訪され、「中国之銅器時代」、あるいは「戈戟之研究」の研究を発表された。また一九二七年、東亜考古学会の龜子窩の発掘がおこなわれると、みづからこれに参加され、さらに一九二八年牧羊城の発掘には、その門下の荘厳君を派して協力の意をしめされた。ところが、一九三〇年には、みづから発掘団を組織し燕の下都発掘を遂行され、原田淑人先生をはじめわれ〳〵にも参加見学の便宜をはかられた。なおとくに、われ〳〵としてわすれることのできないのは、わが東亜考古学会の派遣学生、駒井和愛君をはじめ筆者たちの指導その他の面倒をみられたことである。また一九三三年、原田淑人先生は北京大学において講義されたが、これにも馬衡先生の斡旋があつたこととおもう。

平生、中国金石学の講義をつづけ、金石文字の学には、もとよりふかい研鑽をつまれたわけであるが、考古学的研究法の必要をつとに痛感され、これを金石の学問に導入することに意をもちいられた。さきにのべた発掘もそのあらわれであるが、たま〳〵筆者の留学中にも中国大学校庭で唐の墓誌が発見されると、すすんでこれが発掘を計画され、筆者もこれに参加することができた。また、さきにあげた「中国之銅器時代」も、文献的資料を操作したものであるが、その観点はまつたく考古学的なものであつた。

一九三三年、故宮博物院院長となり、戦禍の波及するをおもんばかり、いちはやく故宮の収蔵品を南にうつした。この功績は、中国において、いまもなおたかく評価されている。一九五〇年の解放後も、北京にとどまり、前記の主任委員となられたが、高年のためひきこもりがちのようであつた。しかし、それにもかかわらず、漢魏石経の研究はつづけ、ある程度その稿本もできているらしい。馬衡先生は、中国の金石学者として泰西の考古学を導入することにつとめられた、またそういう時代の人であつた。しかるに、先生の晩年、とくに中国の考古学はさかんになり、解放後もさらに盛大をきわめつつあるのは、先生においてはたして、いかなる感慨をもたれたであろうか。いま先生を偲びつつ、その

業績の一部を以下にしるしたい。

石鼓為秦刻石考（『国学季刊』第一巻　一期　一九五三年刊）

漢熹平石経論語堯曰篇残字跋（『国学季刊』第一巻　三期　一九五三年刊）

新鄭古物出土調査記（『東方雑誌』第二一巻二期　一九二五年刊）

孟津出土古器物紀事

隋書律暦志十五等尺　一冊（一九二七年刊）

集拓新漢魏石経残字　四冊（一九二七年刊）

中国之銅器時代（『北大国学月刊』第一巻六期　および『考古学論丛』第一冊　一九二八年刊）

戈戟之研究（『燕京学報』第五冊および『考古学論丛』第二冊一九二九年、一九三〇年刊）

記漢「居延筆」（『国学季刊』第三巻　一期　一九三二年刊）

従実験上窺見漢石経之一班（『慶祝蔡先生論文集』上冊　一九三三年刊）

新嘉量考繹（『故宮博物院年刊』一九三六年刊）

宋茫祖禹書古文孝経石刻校釈（『歴史語言研究所集刊』第二〇本　一九四八年刊）

（水野清一）

岡山大学助教授三吉希氏訃

岡山大学助教授三吉希氏は、去る六月二十六日萎縮腎で逝去された。氏は昭和二十一年九月京都大学を卒業後、特別研究生として研究に精進され、一時郷里高知県宿毛・中村両高校に教鞭を執られたが、二十七年一月国史研究室助手として再び京大に帰任された。氏が助手として研究室運営の劇務に当られた期間は、内外の状勢多難を極め氏の費された心労も一方ならぬものがあつた。傍ら本会庶務委員として例会運営その他の実務に心肝を砕かれ、会の急速な発展に寄与される処少くなかつた。その温厚、而も泰然たる風格は周囲の挙げて仰慕する処であり、二十八年十二月岡山大学に赴任後も、各方面の尊敬を集められ、また死の直前迄学生を指導されたと承り、厳粛襟を正さしめるものを覚える。

不幸三十四才にして夭折された氏には、「佐藤直方の学問論」（本誌三六ノ一）をはじめ、専攻の近世思想史、特に儒学史に関する論稿があるが、その何れも氏の温かく、しかも真摯な人間追求の態度を窺うに足るものである。

幸いにして家庭も持たれ、岡山に落着かれ、今後の活躍を最も期待された人であつただけに、哀傷は一入であるが、今は氏の御冥福を祈り、併せて御遺族の御多祥を念願するばかりである。

（上横手雅敬）

執筆者紹介

米田賢次郎	京都大学助手
小葉田　淳	京都大学教授
荒木　敏一	京都学芸大学教授
池内　義資	今治高校教諭
川端　眞治	京都大学大学院学生
金関　恕	京都大学大学院特別研究生
富沢　霊岸	島根大学講師
村井　康彦	京都大学大学院学生
大島　襄二	同志社高校教諭
石田　善人	京都大学大学院特別研究生

学界消息

史学研究会関係

史学研究会例会　六月四日（土）午後一時
京大文学部第八教室
惣庄制の歴史的意義　石田善人
地方都市と農業　渡辺久雄
ピルトダウン人問題について　有光教一

国史関係

読史会例会　五月二八日（土）午後一時
京大史学科演習室
防人考—東国と西国　岸俊男
明治初期大阪周辺における商品生産と階層分化の発展　高尾一彦
大谷史学会大会　六月四日（土）午後一時
大谷大学四一教室
中国の石仏について　水野清一
紀州花園村大般若経の書写と流伝　五来重
日本史研究会春季講演会　六月一八日（土）
午後一時　立命大文学部
戦後十年の歴史学の歩み　北山茂夫
経済学教科書と歴史学　岩井忠熊
大阪歴史学会春季大会　六月二六日（日）
午前九時　関西大大学院
封建崩壊期における農民闘争　鷲見等曜
小林茂　角山栄
東大寺をめぐる政治情勢　井上薫

東洋史関係

西蔵学会　五月二一日（土）午後二時
京大史学科演習室
アムド方言について　西田龍雄

西洋史関係

西洋史読書会例会　六月二九日（水）
京大史学科第二教室
R. Rolland, Journal des années de la guerre (1914—1919)　高田彬臣
H. Thode, Michelangelo und die Ende der Renaissance　谷泰

地理学関係

人文地理学会第二回例会　六月廿五日（土）
京大附属図書館
市場連鎖とC・B・D（中央業務地区）の限界について　樋口節夫
紀ノ川河岸における古墳の位置についての考察　近藤忠

考古学関係

京都府竹野郡網野町小浜海浜縄文遺蹟の調査
網野町教育委員会の委嘱により、六月廿四日より三日間、京大考古学教室より樋口隆康講師が同地に赴き、海浜砂丘下に埋没せる縄文式前期末の土器の包含層を検出した。

史学研究会例会

日時　十月一日（土）午後一時
場所　京都大学楽友会館（市電近衛通下車）
水力エネルギーに関する歴史地理　末尾至行
日本における封建化の過程について　黒田俊雄
清代淮南塩販路の争奪について　佐伯富